円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

1965

7月・8月

日本ＧＡＰニューズレター

— １ ９ ６ ５ —

7月・8月号目次　　通巻第29号

アダムスキーにたいする再評価 …… デスモンド・レズリー　1
新時代の宗教 …… 釘宮義人　3
テレポテイシュン …… ゴードン・クレイトン　5
円盤は重力場応用の宇宙機か …… ポール・ノーマン　8
世にも不思議な物語 ——第二部 …… ゴードン・クレイトン　12
テレパシー講座　6 …… C・A・ハニー　20
ＵＤの会合始まる …… 27

アダムスキーにたいする再評価

デスモンド・レズリー

筆者はアダムスキーの最初の書〝空飛ぶ円盤実見記〟の共著者であり、英国の考古学者、作家として著名な人物である。一九五四年にア氏と会見以来、大きな疑惑に包まれながらもア氏の言動を徹底的に調査してきた。その結果現在はア氏の親友であったことを誇りにしている。この記事はア氏の死去以前に書かれたもの。

―編者―

円盤騒ぎが起こってから十二年になる今日、いまだに議論の的になる人物がただ一人いる。どうみてもこれほどの〝関心〟〝激しい怒り〟〝徹底的な支持〟〝憎悪〟などをひき起こしたコンタクティーは他にいない。しかしこの事はたぶん大衆にとって益となっているはずである。とにかく大衆に何かを考えさせたのだから！

この驚くべき人間と十二年にわたる親しい交際を続けた今でも私は一九五四年にケアリフォーニアで彼と最初に会ったとき以上にさほど利口にはなっていない。私とジョージの共著の書物が浮世の人間どもを仰天させてから一年後である。彼は間違いなく次の三つの一つとして後世に残るだろう。(1)古今未曽有の大ホラ吹き。(2)最も風変りなバカ。(3)エリヤ以来の最大の重要な人物の一人。（注。エリヤは旧約聖書〝列王紀〟に出てくる紀元前九世紀のヘブライの大予言者）

ジョージは激しい人である。たて続けに数時間も話すので、彼の言っていることは事実なのだろうと思うようになる。するとまたたきもしないで彼はきわめて激しい、がまんのならないようなことを言い出すので、聞き手は「そんなことまで言わなくてもよいのに」と思う。そして彼に失望して去って行く。するとたぶん数週間、または数日、数ヵ月たってから彼の言ったことは真実なのだという確信を持つようになる。例をあげよう。教皇ヨハネス二十三世が死ぬ一、二日前に彼はローマからロンドンに到着した。私は空港で彼を迎えた。その日は聖霊降臨祭の前日の土曜日であったと思う。そこからまっすぐにステインズにある私の小型巡遊船へ車で案内した。その船で一族の数名の者が週末をすごしていたのである。彼はうれしそうで、旅行について一切を私たちに話してくれた。すると何かのはずみで例の黄金のメダルの話が出たので、ついにジョージは語り始めた。（注。アダムスキーがローマ教皇からもらったといういわくつきのもの）

「これは黄金のメダルで、私以外のだれもこれをもらうことはできないのだ」と言って、表面に教皇ヨハネス二十三世の肖像を彫り込んだきわめて優美な小型の黄金のメダルを取り出した。後に私が調べたところによると、それまでだれにも譲り渡されたことのないメダルである。「どのようにしてそれを入手したのか？」と尋ねると「教皇が昨日私にくれたのだ」と答えた。当時教皇は死にかかっていて長いあいだだれにも会っていないことを知っていた私は、むしろジョージと対立した。そこで彼はそのときの様子を語り続けた。彼は宇宙人の指示に従ってヴァティカンへ到着

し、すぐに中へ案内され、法衣を与えられて教皇のマクラ元へ導かれた。その場で彼は宇宙人から渡されていた密封した包み物を教皇に手渡した。受け取った教皇の顔は明るく輝き、「これこそ私が待ち望んでいた物だ」と言った。ついで教皇はこのきわめて特殊なメダルを与え、謁見は終わった。

さて、ジョージをヴァティカンへ連れて行ったのはルウ・ッィンスシュタック女史—あの信頼のできるルウであった。（注。英、独、仏、伊等の各国語に熟達したルウが通訳として同行した）それで私は彼女に照会してみたのである。その返事によると、二人はヴァティカン宮殿へ行ったが、私用出入口へ近づいたとき、「首に紫色をつけた」一人の男が現われた。ジョージは叫んだ。「あの男だ！」これに迎えられて中へ導かれた。二、三十分してからジョージは一九五二年に砂漠で行なわれたコンタクトの直後に目撃者たちが述べているのと同様の興奮と狂喜の状態で再び姿を現わした。彼はすっかり宇頂天になっていて、唖然としているルウに告げた。「彼に会った！　彼に会った！」彼が謁見の模様をルウに話した程度の内容は私も聞いている。まさかただのひやかしでヴァティカン宮殿へ入り込み、高位の人に迎えられるとはルウにも考えられぬという。彼は宮殿内にいるあいだにたしかにすばらしい体験を持ったのである。（注。この点については大体同じ内容の書簡をルウが編者宛によこしたことがある）

後に私が大修道院長に例のメダルについて話したら、院長はおったまげて、そんなものは最も特殊な事情のある人でないと与えられるはずはなく、自分の知る限りではそれをもらった人はまだいないという。

私の大きな疑惑にもかかわらず、どうやらジョージはヨハネス二十三世の死の二日前に会ったらしい。そして教皇に封をした包み物を渡したようである。

その包みの中に何が入っていたのかと尋ねたら、自分は知らないと彼は答えた。それはヨーロッパへ出発する前にブラザーズ（他の惑星の兄弟）から与えられたもので、「教皇にそれを渡しなさい。そのためのあらゆる手配はヴァティカン宮殿内でととのえられるはずだ」と申し渡されたという。どうもブラザーズは他のあらゆる場所と同様、この宮殿内にも第五列（注。スペイン内乱で活動したフランコ将軍側のスパイ部隊）を潜入させているらしい！　ジョージの話によると、その包みの中には公会議にたいする指示と助言が入っているのではないかという。後のその会議の議題、すなわちキリスト教徒の統合、ユダヤ人憎悪の解消、その他教会の維持に必要な常識的な処置を考えてみると、その包みには実際には次のような文句が書かれたメッセージが入っていたものと思われる。「それをやり通せ。さもなければ去れ」これはもっとていねいな言葉で述べてあったのだろうが—。

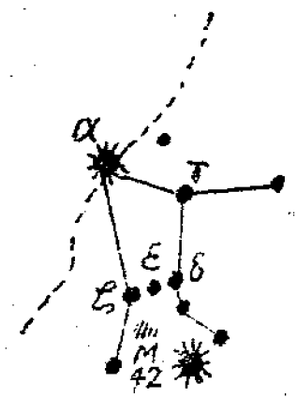
以上はいかにもジョージらしい。だれかが、これ以上もはや彼の話を信ずることはできないと決めると、彼は後になって結局は支持されるような話を持ち出してせまってくる。私はまた一九五四年に彼と一緒にいたときを思い出す。そのとき彼はヴァン・アレン帯（注。当時は未発見）について残らず話してくれた。地球の表面から数千マイル離れた彼方にある輝くはん点である。その後この帯のうち二つは発見された。三番目は未発見だが、宇宙飛行士が月に向かって出発したときに発見されるだろう。

ジョージの欠点の一つは、報告の仕方がきわめて下手だということである。彼は目で見たままの記憶を持たないし、物事や場所の記述はかなり混乱している。これについては、かつて私と彼が一緒に旅行したときの模様を彼が第三者に話して聞かせる際に調べたことがある。どうやら大きさ、日時、形、色などは彼にさほどの印象を与えないらしい。ゆえに、たしかに彼の円盤旅行の体験記には遺憾な点が多い。だからといって彼の体験記が真実ではないというのではない。ただ彼は目で見える物を言葉で表現するのが困難なのだ。彼がほんとうに打ち込むと抽象的、精神文化的な話題がはるかに得意である。たぶん彼が真に打ち込んで語るのを聞いた人はいないだろう。それは全く経験によって得たものである。講演の際は彼は神経質となり熱狂的となる。彼は疲れやすく、極度に精神力に頼ろうとする。しかし一人きりになってゆっくり休養すると全く別人のようになる。声はより深く、より美しくなり、その内部で神なる〝意識〟が呼吸を始めたかのように殆ど人格の転換が行なわれるのである　こうした瞬間こそ私にとっては忘れがたく銘記すべき時なのである。

ジョージについて言えば、彼が出現したことは世界が豊かになることであり、彼が去れば世界は貧しくなると私は思う。驚くべき情況を伝えて人々の目を初めて実際に覚まさせたのは実に彼である。しかも彼は長い年月と批判のテストに耐えてきた。この地球と他の惑星の兄弟たちとの一体化が実現するとき、ジョージ・アダムスキーの名は敬愛と名誉との中に残るだろう。

個人的に言って私はジョージ・アダムスキーの友人であることを残念に思うことは決してないだろう。　一九六五年一月

新時代の宗教



釘宮義人

空飛ぶ円盤は、いくら考えても空想や幻想の所産ではない。たしかに実在するものだと思われる。現に私自身それと覚しきものを二回ほど実見している。もしあの空飛ぶ円盤が実在するなら、それを製造し、それを操縦しているものは地球人ではなく、他の遊星の生物であろうと考えざるを得ない。　アダムスキーのいうとおり、それが火星や金星等太陽系の諸遊星の兄弟たちであるとするなら、何とこの宇宙はすばらしい処であろう。アダムスキーの伝える金星や土星などの人類の高度な精神（即物質）文明の様子をみる時、我らは目をみはり襟を正さざるを得ない崇高な思いにかられる。

旧約聖書を読むと、エゼキエル書には正しく空飛ぶ円盤に違いないと思われる他界的存在がユーフラテ川の上を縦横に運動する場面をかいている。又あのエリヤが火の車にのって天に帰っていったなどという記事は、空飛ぶ円盤の事を想起せしめずにはおかない。

イエスやシャカが輩出したあの古代に於て、世界はそれぞれローマ世界であり、インド世界であり、その中で宗教はそれぞれ民族神をかかえて、新しい大世界的宗教への胎動を示してその陣痛

のうめきを発しているのが彼ら聖者たちである。それより二千年たち、三千年たった今、世界の宗教はいまだに夫々の宗派、教派に別れて、人の宗派の悪口をいっている状況下に科学の目はこの大宇宙空間に他の生命の存在を確信しだして来た。それかあらぬか、二〇世紀に入る頃より、世界にはペルシャのバハイズムだのアメリカのニューソートの連中だの、日本の大本教のように万教同根論を称え何とかして宇宙的帰一的宗教に帰ろうと新しい胎動をしてきたかに見える。今のように科学が発達すると、私にはどうも古い宗教のワクの中よりも別に科学のワクの方が先陣を承ってそういう宇宙的宗教の門を開きそうな感じがする。前号にも書いたけれど、宗教界が共産主義を唯物論だとか何とか毛嫌いしている中に、その唯物論の方がお先に物心一如の統一的世界を感づきはせぬかと思う。

現代は世界歴史の中でも、特にすばらしい時なのです。人類の目が宇宙に開かれようとしています。科学も政治も芸術も、宇宙を意識し宇宙を舞台とするのです。我々の科学は火星でも金星でも通用する科学でなくてはならず、我々の持つ政治は金星人にも火星人にも又他の太陽系の住人たちにも通用するすぐれた政治形態でなくてはなりません。又我々の持つ芸術も他の遊星に行き、そこでも共感をうける芸術でなくてはなりません。我々も又他の遊星人の文学や音楽を観賞しそれが理解できなくてはならない。そういう時代が来るのですから、ひとり宗教だけがとりのこされるわけにはいきません。我々のアーメンか南無妙法蓮華経や南無アミダ仏は宇宙のどの星に行っても深い信仰心を以て受け入れられ得るそういうものでありたいと思います。

ちなみに、私は資本主義と共産主義とどちらが正しいかを考えるとき、前述したような高度に発達した宇宙人がもしあるとして彼らが地球を訪問してくる時の事を考えるのです。共産主義者は喜び、資本主義者は顔をしかめると思います。そういう宇宙人への反応をみるだけでどちらが正しいか判るような気がします。ごく大ざっぱで子供っぽい「裁判」ですがね。例えばSF小説を読んでみても、ソ連の作家のものにはしばしば宇宙探険の地球人と宇宙人たちとの交歓風景がよくでるのですが、アメリカの作家ではしばしば早速交戦状態です。アメリカから入ってくるSFマンガをごらんなさい。いつでも宇宙人は悪人で地球を攻撃してきます。人をみれば敵と思えという意識のあらわれです。空飛ぶ円盤が実在する。それは他の遊星から来たものだという事がハッキリしたあかつき、地球上の反応で何よりも早いのは、NY株の暴落でしょう。私はアメリカ人は好きですが、アメリカの資本主義のアクラツさには血がのぼる思いがします。

ともあれ、今我々が近づき且つ把握しつつある宗教はこういう宗教です。宇宙の全生命と手を合わせて祈り合い、生命を注ぎ合う宗教です。

筆者は大分市花高松七八六在住。
聖炎社主宰。求道誌〝愛〟発行。

テレポテイション

ゴードン・クレイトン

1　メキシコ市に突如出現した兵士の事件

一五九三年（注。文禄二年、秀次の時代。秀吉が大阪城を築いて十年後）十月二十五日の朝、メキシコ市のプラサ・マヨール（主大広場）に突然一人のスペイン兵が現われた。彼はその時フィリピン群島の城壁で囲まれたマニラ市を警護する連隊の記章を付けていた。太平洋の彼方九千マイル以上も離れた反対側の都市である。この兵士がどのようにしてメキシコ市へ来たのか？　ほんとうは彼にもわからなかった。わかっていることは気づいてみたら自分がマニラにいないで、突然メキシコ市にいたということだけである。しかし彼が知っていると称する事柄が他にもあった。フィリピン総督のゴメス・ペレス・ダスマリナス閣下が死んだというのだ。これは途方もないデマとして、このことはたちまちメキシコ市内に広がっていった。

一体この兵士がどうしてこの遠距離を軍服をさほどよごしもしないで旅して来ることができたのかは不明だが、メキシコのスペイン人官憲はマニラ守備隊の脱走兵として彼を投獄した。かくてこのいまわしい事件もヤミに葬られてしまい、もちろん人々は再び胸をなでおろしたのである。

こうして月日が過ぎたが、その間兵士は監禁所の中で衰弱していった。大帆船がスペインから正規の航路を通ってマニラ径由でメキシコ西海岸の港アカプルコへニューズをもたらすのに要するほどの長い日々が過ぎたのである。アカプルコからはそのニューズが伝令によって大山脈を越え、広い空のもとのメキシコ高地へ伝えられるのである。

すると突然メキシコ市にニューズが流れた。フィリップ二世から派遣されていたフィリピン総督のゴメス・ペレス・ダスマリナスが死んだというのだ。ちょうど総督がモルッカ諸島へ遠征のため出航しようとしたときに、プンタ・デ・アスフレ（注。硫黄岬の意）沖で反逆的なシナ人乗組員に殺されたという！　しかもマニラ守備隊の不思議な兵士がメキシコ市のプラサ・マヨールに現われたその日に殺されたのである。

魔法や悪魔の仕業を常に警戒していた宗教裁判所はこの事件を取り上げた。しかし依然として兵士はどうしてマニラからメキシコへ来たかを説明できなかった。言えることはただ「オン鳥が鳴き声をあげる時間よりももっと早く来た」ということだけだった。

事件をもっと詳細に調査するために裁判所はその兵士をマニラへ送還することを命じた。そしてマニラへ到着してから、少なからぬ証人の言葉に基づいて、彼が一五九三年十月二十四日の夜、マニラで実際に軍務に服していたことが確証されたのである。と同時に翌朝彼は九千マイル以上も離れたメキシコ市のプラサ・マ

ヨールで逮捕されたことも立証されたのである。

このエピソードについては確かな記録がある（ルイス・ゴンサレス・オブレゴン著〝メキシコの大通り〟からM・K・ジェサップ著〝円盤問題〟第三部に印用されている）。作り話ではないのだ。こうした現象を名付けるのに最もよい用語は、心霊研究の記録からすでにわれわれにはおなじみの言葉〝テレポテイシュン〟である。（注。瞬間的遠隔移動というような意味）

われわれは多数の失踪事件、誘かいと思われる事件、テレポテイシュンと思われる事件等の記録を持っている。一九六三年七月・八月号の〝空飛ぶ円盤評論〟誌で私はスウェーデンの学生オラフ・ニールセンの事件について報告した。彼は一九六〇年八月二十五日の午後、スウェーデンのハルムスタット付近で円盤にさらわれて運ばれ、或る秘密の基地へ連れて行かれたというのである。前記のマニラ—メキシコ事件やその他多くの事件はすべて円盤に関係のある現象だと私は言いたい。これについて近年の例をもっとあげることにしよう。

故M・K・ジェサップ著〝円盤問題〟の中で（ついでながら彼の死は多くの不思議な死亡事件の一つである）多数の古い事件を取り扱っているが、前記のマニラの兵士の事件も含めてあり、更にもっと異常な失踪事件をも述べている。たとえば一八九〇年のオリヴァー・ラーチ事件とか、一九二四年七月の或る日、イラクの砂上で急に足跡が絶えてしまった英国空軍将校デイとステュアートの事件などである。今は紙面の都合で失踪事件や誘かい事件の異常な問題を詳細に述べる余裕はない。この記事の目的はただテレポテイシュンの証拠を調べることにすぎない。すなわち円盤が或る場所で人をひろい上げて別な場所でおろしたと思われるような事件の例証である。

私はもちろんただちに反論を受けるだろう。「マニラの兵士の物語は—それが実際にあったとしても—殆ど四世紀も昔のことではないか」「当時はあらゆる種類の物語をでっちあげることは可能であった」「それは再説に言及しているだけで、証拠のかけらもないではないか」等々。残念ながらこの反論には同意できない。それでこれから更に二件の実例をあげることにしよう。

2　ブエノスアイレスの実業家事件

一九五九年の或る日、アルジェンティンの一人の著名な実業家がブエノスアイレスを訪れた後、南部を目指して車で帰途についていた。途中、パヒアブランカのホテルで一泊し、翌日また旅を続けるつもりだった。

翌朝ま新しい車に乗り込んでまさにホテルを出発しようとしたとき、車体全体を包む雲のようなかたまりに気づいた。後になって感じたのだが、この時彼は失神したようであった。そして次にわかったことは自分がどこかの田舎のさびれた土地に車もなくただ一人でいるということだった。道路上を自分の方へやって来るトラックを見て運転手に大声で呼びかけ、パヒアブランカまで乗せてくれと頼んだ。驚いた運転手は自分はパヒアブランカへ行くのではない。ここはサルタで、パヒアブランカは千キロ以上も離れていると答えた！　（パヒアブランカはサルタの南西一、一五五キロの地点にある）そこで実業家は腕時計を見て、驚いたこと

に、自分がバヒアブランカで車に乗り込んでからわずか数分間しか経過していないことがわかったのである。首をひねりながら彼はトラックに乗って運転手のそばに座り、この事を報告するために土地の警察へ出かけた。話を聞いてあきれ返った警官はともかくバヒアブランカの警察へ長距離電話をかけて車体番号や銘柄などを伝えたところ、バヒアブランカ警察は簡単な調査をしてから電話で報告し返してきて、問題の車はまだホテルから数メートルの所にあって、エンジンがかかったままになっているというのである！

私はこの事件をアルジェンティンの日刊紙〝ディアリオ・デ・コルドバ〟の一九五九年の或る号の切抜きから訳した。惜しいことに同紙はこの体験を持った実業家の氏名を明らかにしていないが、その切抜きは〝空飛ぶ円盤評論〟誌のアルジェンティン通信員オスカー・ガリンデス氏から送って来たものである。

3　東京からの道路上で

一九六三年十一月十九日午前八時をすぎてまもない頃、東京富士銀行のカシカ支店の支店長代理である木下氏が藤代バイパスで車を飛ばしていた。彼は水戸街道の松戸と柏のあいだを通過して茨城県竜ヵ崎のゴルフ場へ向かっていた。車の中には他に二人の同乗者がいた。同じ支店の斎藤という人と、銀行の得意先である男である。ところが〝かなまち〟という所を通ってからずっと彼らの前方百五十ヤードあたりに同じ方向に走っている一台の車が目についた。それは黒い車で、トヨペット・ニュー・クラウンという型のもので、東京の車体番号を付けていた。（全く残念なことに同乗者のだれもこの番号を記憶していない）この黒い車の左手後部座席には一人の年輩の男がいたが、それは新聞を読んでいた。運転手や他の同乗者については不明である。

すると突然パッと白煙か水蒸気のようなガス状のものが黒い車の周囲のどこからか噴出した。そしてそれが散ってみると黒い車は消えていた。わずか五秒くらいの出来事である。

その車の番号をおぼえていないので木下氏や仲間たちは追跡の仕様がなかったし、だれが乗っていたか、それがどうなったかを探索する方法もなかった。

この事件は一九六四年三月四日付の毎日新聞の夕刊に報導された。日本の二大新聞の一つである。新聞は幻覚ではないかと片付けたが、三人の目撃者は激しく否定し、絶対に幻覚ではないと主張した。

さあ、どうです？　以上の件のどれにも何かの関連があるように思われるのである。この関連とはみな円盤によるテレポテイシュンの例であると私は言いたい。

最後の例については成行きがどうなったか、消えた車と人間が現われたかを知りたくて日本へ手紙を出した。もし現われないということになれば、もちろんこれはテレポテイシュンばかりでなく誘かいでもあるように思われる。

円盤は重力場応用の宇宙機か

ポール・ノーマン

筆者はNICAP（米国空中現象調査委員会）のメンバーであり、またヴァンダビルト大学天文研究会の一員でもある。現在はオーストラリアに住み、ヴィクトリア円盤研究会の有力な会員となっている。世界中の天文学者を興奮させた新発見（複数）にかんがみて、円盤問題を新たに見直しているという。

×

オーストラリアのヴィクトリア上空を飛ぶ〝脈動する〟円盤の最近の目撃事件は、円盤は重力場応用の宇宙船だという証拠をますます与えている。またオーストラリアのパークス電波望遠鏡は、宇宙船の惑星間航行推進力の秘密を解くかもしれないような新発見に重要な役割を演じている。

十億五千万光年彼方の宇宙空間の地点から現在地球へ来つつある証拠と、不可解な空飛ぶ円盤とのおかげで、重力の性質と宇宙におけるその役割にたいする理解は目前にせまっているように思われる。

重力は人間にとって最もなじみ深く最も重要なもので、しかも最も不可解な力として知られている。アインシュタインの有名な統一場の理論によれば、電気、磁気、重力はすべて一つの力の現われであるというが、われわれはこの力の性質を知って理解するまでは、なじみ深いありきたりの言葉〝重力〟を用いねばならない。

空飛ぶ円盤は重力場を応用したもの、原子力応用、電気の応用、光を応用したものであり、これらの力を意のままに次々と応用し変えているのではないかと円盤研究家からいわれてきた。このいずれにしてもわれらの〝空の訪問者〟は重力の問題を解決し、それを支配する方法を考案していることを示しているようだ。しかし円盤が空中を飛ぶ際に何度も見られた脈動（注。ホタルの光のように機体から発する光が一定の間隔をおいて点滅するように見える状態を意味する）は、つい最近まで最も不可思議な現象とされてきた。

ところが思いがけない方面から驚くべき新しい手がかりが円盤研究界へもたらされた。有名な天文学者フレッド・ホイルと数学者のヴィシュヌー・ノリコールその人である。両人とも彼らの発見に秘められた重大な意義に気づいてはいないだろう。

過去数ヵ月間、天文学者連は〝クァサーズ〟（またはクァシ星）の驚くべき新発見にぼう然となっていた。新しく建設されたパークス電波望遠鏡を操作していた電波天文学者は、三C—七七三と呼ばれるこれら超新星の一つの位置を正確に示したのだ。その位置はケァリフォーニアのパロマー二百インチ鏡へ伝えられ、そこで写真が撮影されたのである。

このような広大な距離で写真の乾板上に写るとは、この輝く星はわれわれの銀河よりも少なくとも百倍の輝度をもたねばならぬ

ことになる。学者連はこの偉大な新発見の重大な意義を理解しようとしているのだが、一方天文学者はこの新星について最も不思議なことは、これらの星が見たところ重力からすさまじいエネルギーの殆どを得ていることだという。これは宇宙において全く類のないことである。なぜなら太陽の如き従来のありふれた恒星はそのエネルギーを内部の核反応から引き出していると考えられているからだ。

最近の英国天文学会の会合の席上でホイル教授は思いがけない発表を行なった。「これらの新発見の星は重力を利用しているにちがいない。そうだとすれば重力を正しく理解することが重要となってくる」彼は円盤研究家や科学界が長いあいだ求めようと努力してきた事柄を指摘した。「重力を説明しようとして故アインシュタインが用いた数式は、ただマイナスの符号をプラスに変えるだけで反重力を説明することになるといってよいだろう」

ホイル教授は声明の終り近くで次のようにほのめかした。「もっとよい観測をするにはエックス線望遠鏡をロケットに乗せて軌道に打ち上げるべきだ」更に次の言葉を続けたが、これは心の広い科学者を、いたるところにいる円盤研究家のもとへ行かせて、世界中で発生した無数の脈動する円盤観測例を再調査せしめるだろう。「もしこれらの星が重力を利用したものならば、それは脈動しているはずである。そして一秒間に一度くらい鼓動しているだろう」星に関してこうした声明が行なわれる一方、重力が有すると思われる特徴をも述べた。円盤が空中で演じる驚くべき性能が最初に報導されたとき、オーソドックスの学者はおきまり通り「そんなことは不可能だ」と宣言した。「そんな信じられないほどのスピードを出せば摩擦で金属は溶けるだろう」「空中で急速に停止したり瞬間的に加速したりすれば、乗っている人間が耐えられないだろう」「人間は反重力の制御法をまだ考えついていないので、空中に停止することは不可能だ」等々。

地球の発明の殆どは自然界の観察から得られたものである。たとえば人間は鳥を観察して初めて飛ぶことを思いついた。橋のアーチは足のアーチに似せてより大きな力を加えている。分光器はただニジを模倣したものにすぎない。

モーウェルとヤルーンの練炭工場は自然を模して圧搾することによって茶色の石炭から黒色の石炭を作っている。なぜなら、この地区で土地が隆起した当時、自然は充分な圧力を加えるための重荷を与えなかったからである。切り開いた堀割に沿ってラトロープけい谷の大発電所は自然界で最初に見られたエネルギーを作り出し、送電している。次に水中音波探知器がある。これは水中の物体を探るために潜水艦に応用されているが、これは普通のコウモリがずっと応用してきた方法である。人類の発明のヒントにおいて自然が演じた役割について本を書こうとすればいくらでも書けるだろう。

空飛ぶ円盤の重力場も自然界の模倣である。この模倣に含まれる原理はわからないが、これがひとたび達成されるとその反応や効果はどのようなものかはわかっている。たとえばわれわれは地球の重力場の中に住んでいる。地球は時速一千マイルで自転しているが、同時に時速四万三千マイルで空間を二次の方向に突進しており、また時速七万二千マイルで三次の方向に動いているのである。われわれは太陽のまわりの軌道を動くとともに、太陽系は

銀河系内の軌道を動いていて、結局少なくとも信じられぬスピードで三つの方向に動いている。しかるにわれわれは地球の重力場の中できわめて快適な状態にある。動いているという感じすらしないのだ。

これと同様に、人工的な重力場の中にいる人間もすさまじいスピードに耐えられるはずである。機体は分解しないだろう。というのはアインシュタインが指摘したようにその力が同時に適応するからである。重力は円盤の色光の変化によって、制御されていることがはっきりとわかる。円盤が空中で驚くべき離れ業を演じる際に色光が変化することは、簡単な視覚の法則で説明される。最も長い波長の光はわれわれの目に赤として現われる。これ以上の長い波長を持つ光はわれわれの視力を超えてスペクトルの赤外線帯に入る。一方最短波長の光はわれわれの目に紫色に映る。これ以上の光はスペクトルの紫外線帯に入って目には見えない。

円盤の色光の種類は次のとおりである。太陽光線の中では円盤自体の輝きよりももっと強く輝くので、それは金属のように見える。夜間空中に停止しているかまたはゆっくり動いているとき、そして見たところ多大の動力を必要としないとき、それは暗いオレンジ色または薄赤色に見える。ところが動力を要するときは色は光輝を増し、黄色か、銅が燃えるときの炎のような黄緑色であぞ。高速度になると通常極端に白くなるか白に近い青色となる。

光に及ぼす重力の影響は天文学者が星を観測して指摘してきた。ゆえに円盤の重力場は可変的なものであり、光波の周波数に影響を与えるほどに強力である。このことは重力のコントロールと円盤の色光の変化の両方を説明するものと言えるだろう。

重力場の解釈は、眼視観測ばかりでなく、レイダーで測定された円盤のすさまじいスピードの摩擦に機体が耐え得る理由を説明している。みな知っているような簡単な物理の法則によれば、物体が空気の分子中を急速に動くとき、摩擦によって物体の表面にプラスの電荷を帯びる。また簡単な電気の法則によれば、同種類の極は互いに反発し合い、異種類の極は引き合う。こうして大気中を急速に進行するとき、円盤の内部にプラスの電荷を誘導して、分子は反発され、動く船体の周囲にわずかな真空帯を生じやすくなる。そして摩擦を減じるのである。簡単な音響の法則によって、円盤に関して何らかの音響があったとしてもそれは真空中を通らないことはわかっている。（しかるに円盤が低空で観察されたとき、またはゆっくり動いたり、空中に停止しているときなどは、ときとしてブーンというかすかな音が聞こえたと報告されている）

加うるに重力場はその周囲に空気を引き寄せているはずである。そこには騒乱状態はないだろう。しかも摩擦を減じているのであるから無音の理由となる。

しかも重力場の存在はときとして円盤が雲のように現われる理由を説明している。特にゆっくりと飛んでいるときはそうだ。たとえば最近オーストラリアのウォンタギーの付近で運転手たちが体験した自動車の追跡事件がある。重力場はその表面に霧、煙、ホコリなどを付けやすいといえるだろう。

重力場の解釈は、円盤が或る地点に現われたときにときとして起こるラジオ、テレビの電波妨害をも説明する。たとえば一九六三年九月十九日にウォンタギーと南ダドレイ一帯に発生した例がそれである。円盤の眼下一マイルの広さの地域ではテレビ受像機

の映像にかなりの変化があった。スクリーンが白になったり、緑色になったり、線がいりまじってシマ模様のスクリーンになったり、一つのスクリーンに二種の画像が映ったりした。円盤が出現すると通常まっ先にラジオやテレビが影響を受けるのである。

重力場が接近してくると自動車の点火装置やヘッドライトがそれの影響で弱まることが知られている。円盤が都市の上空低く浮かんでいるとき、その町の燈火が消えてしまったという例は多くあった。各地で送電線に故障が起こったこともあった。こうした強い影響は通常円盤が地上の装置にきわめて接近する際に起こるのである。

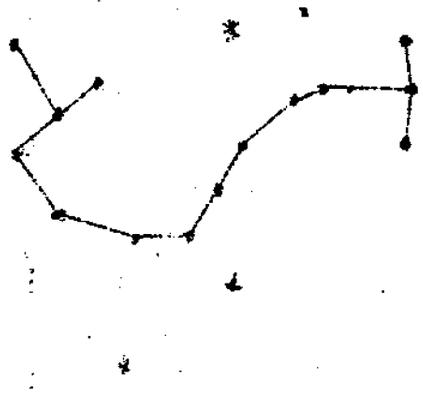
一九五七年十月十五日と一九五八年一月三十日のあいだのこの三ヵ月間に、円盤が地球の各都市に下降して、この奇妙な物体の出現に関連した電磁気的な原因による異変が少なくとも四十一回発生している。この事件としては自動車のエンコ、ヘッドライトの弱まりや光の消滅、停電、ラジオ、テレビにたいする妨害などがあり、発生地はフランス、イングランド、イタリア、ノールウェイ、アルジェンティン、ペルー、ヴェネズエラ、カナダ、オーストラリア、米国などの各国にわたっている。

しかるにこうした状態にかかわらず、一般科学界は眠っているのである！

重力場はその外側の端に微粒子を引き寄せることによって、円盤の乗員を放射線から保護するだろう。これは地球の重力場がこの危険から人間を保護しているのと同じ方法である。更に重力場は円盤が宇宙空間を高速で進行する場合に、流星、宇宙ジン、その他の物質をそらすことによって船体を保護するだろう。

オーソドックスの科学者は重力場の解釈を嘲笑してきたが、現代ロケット工学の父であり、V2号の発明者で、ヴァーナー・フォン・ブラウンにロケット工学を教えたハーマン・オーバート博士が重力場をとり上げて以来、科学者たちの嘲笑は消え始めている。

アインシュタインの理論でさえも、オーソドックス科学者の狭い心の中に小さな割れ目を作るのに核分裂を必要としたのである。ときとしてこの割れ目はいやいやながら広がっているように見えるが、とにかく広がってはいるのだ。たとえばオーソドックス科学はここ二十年来にやっとこの銀河系だけで数十億の惑星が存在することに気づくようになったけれども、生命は最初に人間を供給するだろうという簡単な数学的な可能性を認める科学者はまだ少ないだろう。またドグマティズム（独断）により遅らされて他に何もすることがないというのならともかく、知的生命は手持ちぶさたのままぼんやりと座ってはいないという簡単な生命の法則を科学者は認めてもいない。最もよきオーソドクシー（ありきたりの慣行）は各段階のあいだの空間にすぎないのだ。この段階の度数はそのあいだの抵抗者によって制約されている現状である。



世にも不思議な物語

—第二部　事件の分析—

ゴードン・クレイトン

先回の記事で私はブラジルのポンテポラン地区の農夫A・V・Bの驚くべき体験について語った。（注。詳細は本誌五月・六月号を参照）その際の本人をアドヘマールと呼ぶことにしたが、われわれが知っている限りこれは彼の本名ではない。不可解な理由によって本人は匿名を希望した。ここに私は追加記事を提供してあの物語の詳細な分析を試みることにしよう。

機体中で見られた器具

この器具の説明は公表しないほうがよいと賢明にも助言を与えた人は著名なブラジルのジャーナリスト、ホアオ・マルティンスであったことは間違いないと思う。マルティンス氏はリオデジャネイロの一流誌〝オ・クルセイロ〟その他数種類のブラジル一流新聞にUFOについて多くの記事を書いてきた人である。氏は一九五七年ないし五八年にリオでアドヘマールに会った人の一人であるが、「具体的な証拠がないために体験について公表しても無駄だ」とアドヘマールに語ったのは氏であるとビューラー博士は考えている。右の意見についてビューラー博士はマルティンス氏と真向から対立している。私としては博士を弁護する。なぜなら例の事件は具体的証拠に欠けてはいないからだ。

血液の採取

事件をふり返ってビューラー博士は、この血液の採取は、あとですぐ行なわれた例の女との或る体験と何らかの関連があったのではないかと考えている。この点について博士は少々素朴であると評しても博士は許してくれるだろう。博士自身はドイツ系の医者であるので、血液テストの目的について疑念を起こさないのだろう。ブラジル全人口の四分の一ないし二分の一は遺伝性の梅毒をもっているが、これは植民地時代の名残りである。わずか数十年前、ブラジルの地方医療局々長ベリサリオ・ペンナは、梅毒り病率はたしかに四分の一以下ではないと語っていたし、ブラジルの医者の多くも大体に同様のことを言っていた。このことは公然の知識であり、彼らの主な保健問題の一つとしてきわめて卒直に語られている。

女の金髪と中国人のような目付き

これは全く興味ある問題である。白い皮膚を持ちながら中国人のような目付きをした人種は地球上に存在しない。アーモンド型の目（細長い目）とモンゴリアン・フォウルド（蒙古人のような

目のくぼみ）の人間はアジアの多種族間に見られるが、彼らの皮膚は黄色か茶色で、決して白ではない。この〝蒙古人の目〟やその他の特徴を持つ人間は北米のアメリカン・インディアンにも見られる。彼らの祖先はアジアから来たのであって、ゆえにその皮膚は赤か茶である。

一九六一年に刊行されたコラル・ローレンセン夫人の著書〝円盤の大いたずら物語〟を読んだ人は、ブラジル最南端の州リオ・グランデ・ド・スルのリンハ・ベラ・ヴィスタに住む農民オルミロ・ダ・コスタ・エ・ロサの物語を記憶しておられるだろう。一九五四年十二月九日に、その農夫は白昼一機の円盤が着陸するのを見た。するとその中から三人の人間が現われて、一人は彼から数フィート以内の距離に接近したため、子細に相手を観察することができた。「彼らは中位の背丈で、肩巾は広く、長い金髪を持っていたが、それは風でゆらめいた。おそろしいほど白い皮膚とつり上がった目をしていて、地球の人間の標準の格好から見れば異常なものであった」と本人は言っている。

右の人間たちは、宇宙からやって来たアドヘマールの〝女友だち〟と同種の者だとは私は思わない。なぜならこの人間たちはわりに背が高いからだ。それともあの女が異常に小さかったのだろうか。しかし後者の可能性は女と一緒にいた小さな人間たちによって除外されるように思われる。（注。女だけが異常に小さかったとは思えないの意）しかもアドヘマールを捕えた〝人々〟はヘルメットを着用していたのだ。ダ・コスタ・エ・ロサ氏が見た長髪と中国人の目付きをした白い皮膚の人間たちはヘルメットを着けていなかった。アドヘマールの〝女〟はたしかにその乗員の男たちと同じ種族だったのではないか。

一九五四年に前記の農夫が目撃した人々はアダムスキーが会った宇宙人にきわめてよく似ているし、農夫の見た円盤はアダムスキーがコンタクトした円盤に似ている。「それは探険家のかむるヘルメットのようだった」とアドヘマールは言っている。、それはブラジル人がトウピーと呼んでいるもので、この国では全然着用されない種類のものである。

状況は複雑なようだ。たぶん少なくとも地球を訪問する二種類の種族がいて、それらは白い皮膚と中国人の目付きをしているのだろう。

アドヘマールが音声によって日本語とシリア語を識別できること

ブラジルには多数の日本人がいるし、また多くのシリア人やレバノン人がいる。これらは主としてブラジルの南部や南西諸州に居住している。つまりアドヘマールの体験が発生したと私が推論する場所付近の地域である。くわしくは、地図を広げてみると広大な人口希薄のマトグロッソ州の南端は、リオデジャネイロから千五百キロ真西の所に位置していることがわかる。このことはわれわれを遠い辺境の地、ブラジルとパラグアイの国境へ運ぶのである。

アドヘマールの物語を支持する証拠が別にある。〝円盤の大いたずら物語〟の一三八ページに著者コラル・ローレンセンは、一九五七年十二月二十一日の夜（アドヘマールの事件直後）、ブラ

ツルとパラグアイの国境に近いポンテポラン村付近で、円盤（複数）がジープや車の上を飛んだり、長距離をしつこく追跡したりして、乗っている人々を恐怖のどん底にたたき込んだ有様を述べている。

もしアドヘマールが南西部または西部以外の地に住んでいたとすれば、彼が音声によって日本語やシリア語を識別するなどということは全くあり得ないだろう。彼は教育を受けた人ではないので、自国内を多く旅行してまわったとも考えられない。このため彼が二ヵ国の外国語を識別する要素は彼の居住地域を推定する助けとなる。しかも彼の物語はわずか数日後に発生したUFOの追跡事件の報導によって強く支持される。これは全く異なる径路からとどいた報導である。十二月二十一日のポンテポランにおける車の追跡事件をビューラー博士が知っていたとか、十二月十五日のアドヘマール事件をコラル・ローレンセン女史が知っていたという意味の証言を私は得ていない。

小人たちが地面に描いた二つの円

アドヘマールが素朴な男で、ブラジルの快活な正直な多くの農民の代表的な人間であることは、小人たちの描いた二つの円が何を意味するかわからなかったという彼の言葉によって示されている。その円は結局二個の惑星を示すきわめて賢明なわかりやすい方法なのである。

これに関連して興味ある他の事柄に読者の注意を向けてもらいたい。一九六一年の〝空飛ぶ円盤評論〟誌は、パウル（ポンテポラン地域の真東約四百マイル）の地方新聞から転載した記事を掲げている。〝宇宙人は石を投げた〟と題するその記事は、ホセ・C・ヒギンスという名のブラジル人が、透明な宇宙服を着てとびまわっていたお化けのような七フィートもある巨人たちに巨大な円盤へ連れ込まれてかろうじて逃げ出した有様が述べてある。巨人たちの目は大きくてまるく、ヒゲをはやしておらず、殆ど毛髪もなかった。彼らの一人が地面に円を描いて彼らがどこから来たかを示した。先ず一つの大きな円を描いてから太陽を指し示し、次に七つの小さな円を描いてそれが軌道上にある惑星であることを表わした。そして自分自身と七番目の円とをくり返し指した。これによって明らかなのは実に彼らが天王星から来たことを表現しているのである！

アドヘマールの体験の基本的な目的

ビューラー博士は最も明白な動機として、宇宙から来た人間が地球人と異種交配することによって彼らの遺伝子と染色体を他の惑星の種族に植えつけようとしたためだとしている。博士はまた考えられる動機として次の各項をあげている。

(1) 地球人の〝健康診断〟をするため。
(2) 他の惑星の〝肉体的条件〟は地球人のそれと異ならないことを示すため。
(3) 政治的または文化的な関連を持つための基礎として、惑星間の血族関係を確立するため。
(4) 女が乗員たちにたいする指揮権を持っていたので、気まぐれ

に「されることを望んだ」ため。

以上の各動機のいずれももっともらしく聞こえるが、特に一九五二年に発生したというトゥルーマン・ベサラムの体験が真実であるとすれば、宇宙人の社会組織は女族長制であるかもしれないというよい証拠を持つことになる。（クレイトン注。ベサラムの体験が他のコンタクト例と同じほどに根拠があることを示す証拠を私はまだ見たことがない）ベサラムが会ったという円盤の乗員たちは皆小さい人間で、機長も小さな婦人であった。ただしヘルメットや呼吸補助装置などは着けていない。

ゆえに女族長制が解答となるかもしれない。そしてこれは地球では知られていない制度であることを忘れてはならない。

しかし別な解釈も考えられる

ここにおいて私は別な解釈をしたいと思う。これはわれわれにとってもっとはるかに重要な意味を持つものである。アドヘマールは小人たちが背中に取り付けられた装置からパイプで連結されたヘルメットを着用していたことを明らかにしている。円盤を離れなかった女はかかるヘルメットや装置を着用していなかったが、これはおそらく自分の空気の中にある家にいたからだろう。アドヘマールもヘルメットや呼吸補助装置を持っていなかったことはたしかだが、機体内で呼吸することができたと言っている。しかし彼が激しい吐き気を催したこと、事件後しばらくのあいだ奇妙な肉体的な徴候、たとえば肝臓が痛んだり、顔や腕にハレモノができたりしたことを忘れてはならない。このことは、彼らの〝空気〟はわれわれには不快であるけれども、がまんができないほどでもなく、致命的なものでもないことを意味していないだろうか。それとも全く逆に見て、地球の空気は彼らにはだめだということになるのだろうか。この場合明らかな解決は、八〇パーセントの窒素と二〇パーセントの酸素の混合気体中で生きる地球人の可能性をも含めて、地球人の特性が遺伝するかもしれない混血種または新しい種族を作り出すことにあるということにならないだろうか。それは手短かに言えば、この地球上に住み、しかもブラジルの広大な無人の地域に移住することになっている新しい人種ではないだろうか。とにかくこうした結合体の子孫が現在も残っていて、地球人でなくこの〝訪問者〟たちによって育てられていることを心にとめねばならない。これはジョン・ウィンダムの〝ミドウィッチ・クックー〟の説明にはならないだろうか。

いまやはれわれは疑問に直面している。この種の出来事は過去のいつ頃から発生してきたのだろう？　他にもこうした事件があるのだろうか？　アドヘマールはそれについて少しも積極的に語ろうとはしなかった。一体だれが積極的に語ろうとするだろう。要するにだれも知っているように、ただ円盤を見たというのは趣味の悪さを示すものであり、その乗員を見たとかそれに会ったというのは憎むべき犯罪行為である。乗員と何らかの関係を持ったと称するに至ってはいうまでもない！（注。真実の目撃者やコンタクティーは秘して語ろうとしないの意。自称コンタクティーの中にはいかがわしい者が多いという意味にもとれる。ただし筆者の意見には疑問がある）

実際それはセンセイシュヌルどころではないと言いたい。アド

ヘマールの物語は地球上の長い歴史において新しいものではないが、このテーマに関する証細な推論は次回にゆずることにしよう。

ポンテポランにおける激しい円盤活動の目的は？

〈アドヘマールと類似の事件が他にあったという証拠があるだろうか。あるということは確信してよいと思う。世界中で多数の人が失踪していることはわれわれも知っているし、多くの場合に円盤による誘かい事件が起こった確証もある。これについては少数の例を〝テレポテイシュン〟と題する別な記事で述べた。誘かい事件は充分に認められているようだが、もちろんアドヘマールが会ったのと同じ〝人間〟たちによって行なわれているという確証はない。地球は明らかに多種類の〝宇宙人〟の訪問を受けているが、これらがみな同じ動機を有しているとは先ず考えられない。

しかし私はポンテポラン地域のアドヘマール家付近で円盤や車やジープなどを追いかけた事件を特に注視したい。これはアドヘマールの体験と同じ月に発生した。その目的は誘かいにあったといってよいだろう。相手はアドヘマールと同じ目的に役立つ青年を探していたにちがいないとも考えられるのである！

私がこのように考える理由は次のとおりである。一九六三年十月二十一日の夜、アルジェンティン北西部のトゥクマン地方のトランカス村から四マイル離れた所にある一軒の弧立した農家の上空に、四十分間（午後九時三〇分から十時一〇分まで）高度わずか百メートルの空中に六機の円盤が出現し、静止した。驚いた家族は円盤を充分にながめる余裕があった。これに関する詳細は別な機会にゆずることにしよう。思うに、興味ある点は円盤群がその家に白と紫の強烈な光線を照射したということである。この光線はあまりに強烈であったため、まるで固体のように見えた。「各光線は広がりませんでした。それらは管のようでした」と家族は述べている。

この一軒家の農家は八人家族で三匹の犬がいた。そして四十分間も彼らは恐怖におののいていた。一同はどうなることかと気も転倒し、犬たちも恐れて泣き声さえたてなかったが、円盤が去ってからもしばらく苦しそうにうなり続けた。

アルジェンティンの一軒の農家に六機の円盤は如何なる関心を寄せたのだろう。この家の家人を調べてみればナゾ解きの手がかりになるかもしれない。

先ず家長のアントニオ・デ・モレノ氏がいるが、これは七十二才の老人である。次にその妻ナリ・デ・モレノ（六十三才）、アルヒェンティーナ・モレノ・デ・チャヴェス夫人（二十八才）、フリア・モレノ・デ・コレッティー夫人とこれらの婦人たちの子供三名がいる。（注。これでは七名にしかならない）

これについて注目すべきは、七十二才の家長以外に男はいないということだ。つまり、アドヘマールの場合と同じように宇宙の人間たちの〝心づくし〟を受け人れ、アドヘマールがやったような〝サービス〟をしてくれる精力のある男がいないのである。

待望の声明

さてきわめて興味ある問題を掲げて結論とすることにしよう。

〝空飛ぶ円盤評論〞誌一九五六年一月・二月号に〝宇宙について語ろう—空飛ぶ円盤は実在する〞と題する驚くべき記事が出ているが、その中に同誌の特派員が米国の大物とインタヴューしたと述べてある。この有名な人物は特派員に次のように語っている。

「米国の権威者は、円盤は大気圏外から来る人間が乗っているという事実を確認した。この〝訪問者〞たちは着陸してコンタクトする前に大気圏内で呼吸をし、生きたままでいる方法を解決しようとしていた」

私は一九五六年にこの記事を読んだとき、ただちに〝空飛ぶ円盤評論〞誌の編集者に電話をかけて、この大物がだれであるか内密に教えてくれと頼んだ。すると相手は、これは第二次大戦中の米陸軍参謀総長ジョージ・マーシャル将軍であると答えた。大戦後ヨーロッパの自主性を復活せしめようとした例のマーシャル・プランの発案者である。

マーシャル将軍は自己の本領外にまで進出しているので、それによって円盤問題を多く知ったということは充分に考えられることである。ゆえに九年前に右の声明をしたのは彼であったと私が今洩らしても悪くはないだろうと思う。洩らしてよいという許可を〝空飛ぶ円盤評論〞誌の初代編集長デレク・デンプスターからもらっている。マーシャル将軍は偉大な人であり、高い官職についていた。彼がそう言ったとするなら彼は自分の声明の内容をよく知っていたと信ずることは私には容易である。彼の言明を聞いた特派員—これも不幸にして他界してしまったが—はロルフ・アレグザンダーである。

アドヘマールの驚くべき体験の理由に関する私の説には何かの根拠があるかの如く聞こえるだろう。

マーシャル将軍の説明は、地球を訪れている一、二種類の〝人間〞に言及しているだけだという点であらゆる円盤研究家は私に同意されると思う。つまり将軍の声明は宇宙人すべてに言及したものではない。というのは地球人と同じ程度の身長の宇宙人を見たとか、しばしばヘルメットを着けないで地球の大気を自由に呼吸していたとかいう証言がこれまでにかなり多くあったからだ。

しかしこうしたタイプの宇宙人に関する別な解釈があるが、それはケインブリッジ大学円盤研究会の優秀な若い一メンバーが最近私に洩らしてくれたものである。それによると地球人と同じ姿の宇宙人は実は地球人の裏切者ではないかという。これはきわめて興味ある考え方である。このことは昔バーバリ海岸の騒乱時代にムーア人に加勢した裏切者キリスト教徒を思い出させる。（注。バーバリ諸国の地中海沿岸地方は昔この地方の海賊によって地中海貿易が非常な害を受けた。ムーア人とはアフリカ北西部モロッコ地方に住む回教人種で、バーバリ人とアラビア人との混血種）これはまた円盤の誘かい事件をも説明する。それについて考えれば考えるほどそこには一理あるように思われる。誘かい、洗脳、転向。何か意味がありそうだ！（注。一つの考え方ではあるがこれにはやはり疑問がある。しかしニセ宇宙人問題を考えれば興味ある推論ではある）

×

（右のマーシャル将軍と会見した特派員ロルフ・アレグザンダー博士の人物について〝空飛ぶ円盤評論〞誌は次のように報じて

×

いる。編者）

ロルフ・アレグザンダーはニュージーランドからプラーグへ行き、そこで医学を修めて、後ヨーロッパの多くの大学で分析心理学、神経病学、生化学等をやった。

彼の世界中の旅行や調査研究は本来の研究の基礎となり、その結果〝創造的リアリズム〟の哲学を樹立するに至った。

〝心の力〟の著者であるアレグザンダー博士は、人間の意志の力は上空の雲をも散らすことができるという論証を科学者やジャーナリストに公開してしばしば世間を驚かせた。この精神力学に関する論文は一九五五年十一月・十二月号の〝空飛ぶ円盤評論〟誌に出ている。

ロルフ・アレグザンダー博士のUFOにたいする考え方　（デレク・デンプスターの手紙より）

あなたは（ゴードン・クレイトンは）マーシャル将軍とロルフ・アレグザンダーとの会話の詳細を公表して差仕えありません。

ロルフと私は彼がイングランドに住んでいた当時親友になりました。あなたの手紙を了承して、私は秘蔵している彼の書簡類に目を通すことにしました。よって次の手紙を掲げますが、これはアドヘマール事件のよき補注として役立つと思います。これは一九五八年五月二十九日付のロルフからの手紙で、その中で彼は次のように述べています。

『困ったことに円盤問題はもう珍しいニューズではありません。ただしわれわれが一機の円盤を着陸させてそれを写真に撮り、新聞記者がその乗員とインタヴューすれば別です。これは不可能ではないでしょうが、まだやった人はいません。

おわかりのように、だれしも円盤問題をよく考えてみれば、それについて驚くべき事は何もありません。アインシュタイン氏の亡霊を呼び出さなくても宇宙に遍満するタイム・ディファレンシャルは無限です。おそらくこの地球が形成されるずっと以前に創られたどこかの星からパロマーに現在光が到達していますし、また考えられるところでは、宇宙の無数の惑星で地球よりも数百万年も長く生命が進化してきたのもあるでしょう。

生物学的な進化では単一の細胞から始まり、人間の脳で終わります。続いて進化の新しい局面が展開します。―精神的な進化です。百万年昔、南アフリカの猿人は他のサル共に関して高度に発達していました。今から百万年後には現在の人間に関連して如何なる人間が出現するでしょう？

地球よりも進化において数百万年も先を行く他の惑星（複数）は、高度な意識の、完全な、抑制されない形態を維持するために必要なあらゆる性質を含む、小さな激しい物理的な〝フィールド場〟のような〝精神体〟を発達させているかもしれません。それは形がどのようにもなり、また〝想念のスピード〟でどこへも進行し得る精神体です。

かりにあなたがこんな事がすべて事実だということを知っているとし、ちょうど燃えている家に入るのに消防夫が石綿服を着るように、大気圏内に突入するためにこうした生物によって作られた〝フィールド場の乗物〟を見たことがあるとします。またその生物がわれ

われと通信するのに必要な機構、すなわち音声というメカニズムを持つために、あなたの眼前でわれわれと同様の肉体を形成するのをあなたが実際に見たとします。また彼らがあなたの脳から出る表意信号をキャッチしてあなたの言葉を用いて答えるとします。また天使とか精霊とかの伝説は過去の時代に目撃された右の現象から発生したものであることをあなたが知っているとします。しかしあなたはこんなことを一体どのようにして他人に信じさせることができますか？

一般人に自分たちの理解の範囲を超えた物事を納得させることがきわめて重要であるとは私は思いません　なぜなら理解の単なる代用品は迷信なのであって、ゆえに理解の欠乏する場合は迷信が空隙を埋めるからです。われわれがなさねばならぬことは、現在の時点から自己の理解力の範囲を次第に拡大することにあります。地球人が百万年も進化した惑星人の概念や技術や知性の発達を理解するよりも、アフリカの蛮人はアインシュタインやプランクの数式やテディントンの複雑な装置をもっと容易に理解するでしょう。

要約しますと、如何なる知性ある人といえどもこの広大な宇宙は、現在われわれの理解をはるかに超えた神秘と現象とで満ちていることを認めねばなりません。あと一千年もすればこうした事象のいくつかは神秘でなくなるでしょう。百万年もすれば人間はもっと多くを知るでしょうが、その解決は人間自身の意識の発達と、人間が見たり聞いたりする事柄をただちに理解する可能性とに待たねばなりません」

（26ページより）

コンタクトしていると信じているのもあります。こうした場合は大体に一人または数名のリーダーがいて、恍惚状態（トランス）になり、〝昇天した主〟または他の偉人と通信していると思われています。これは死者と通信していると称している人と大差はありません。ただ主な相違は、後者は死者が霊界というところで霊魂のまま存在していると信じている点にあります。まじめな人でもこんなふうに自分たちが高次な実体とコンタクトしていると思い込んでいます。

こうした超自然現象については次の第七課で詳細に述べることにしましょう。幽霊現象に関しても説明します。こんな現象を「でも実際に起こるではないか」と簡単に片づけるわけにはゆきません。第七課によってあなたは正しい科学的な知識を得るでしょう。

わかった!!

リオデジャネイロの〝オ・クルセイロ〟誌によれば、本誌中の記事〝世にも不思議な物語〟の主人公アドヘマール（仮名）の本名はアントニオ・ヴィリャス・ボアスであることが判明したと同誌一九六五年二月号で報じている。この頭字をとってビューラ博士はAVBとしていたのである。

テレパシー講座　6

C・A・ハニー

第六課

第五課では自己発達の方法と感情の抑制が望ましい理由を少々述べましたが、抑制の必要の主な理由の一つは、怒りによって起こる望ましくない肉体の化学変化と反応を減じさせるか停止させることにあります。

激情が起こったかまたは精神が緊張した場合はアドレナリンが血液中に注入される事実は殆どだれも知っています。アドレナリンは心臓の働きを促進し、小柄な人がその影響を蒙ると殆ど超人的な離れ業を演じることが知られています。この興奮状態が過ぎると本人は一時的な虚脱状態におちいり、同時に筋肉はだらりとします。そしてカゼをひいたように身震いします。この怒りまたは緊張の影響は、こうした際に自身を抑制しないとどうなるかという一つの例です。

自分の感情を抑制しなければならない別な理由があります。ご承知のように、自分が他人から恥ずかしめられたと思うと、しばらくのあいだ相手を怨み続ける人がいます。これは自分の肉体に有害な影響を及ぼすばかりでなく、怨みの念を向けられた相手にたいしても有害な影響を実際にひき起こすこともあります。本講座の始めに、想念は一種のフォースフィールド（力場）のようなものと考えてよいと述べました。この想念は特定の場所や地域へ向けることができますが、これはラジオの電波の場合と同様です。言いかえれば或る特定の人物または場所へ想念波を発射することは可能なのです。

進歩した人は或る程度この想念の働きを自由にコントロールすることができ、進歩と知識が増大するにつれてますますその技術に熟練するようになります。ところが人にとっては、こうした想念の働きが起こっていることに気づきもしないでそれを行なう人もあります。もし人が他人にたいして怒っているならば、その想念は知らぬまに相手に向けられていて、いろいろな現象が発生します。これはヴードゥー教や心霊派の人によって行なわれる魔術的方法に似ていますが、詳細は後に述べます。

想念の型はこうした方法を用いる人の性格や倫理観などによってきまりますから、こんなふうにして望ましい、または望ましくない影響を及ぼすこともできることを理解しなければなりません。

想念の影響には少なくとも四種類ある

想念の影響については、次の各種類が想念波の応用により定期的に起こります。(1)他人を助けようとする人が想念波を意識的に

（注。アダムスキーのいう意識とは異なる）用いる場合。たとえば他人の病気を治す場合。(2)非道徳的な邪悪な動機によって想念波を用いる場合。たとえ本人が想念を意識的に応用できるほどに精神的に発達しているとしても、人格や道徳において等しく急速に発達することはできない。かかる望ましくないことを行なう際には因果の法則が含まれていることを本人が知っているにしても、ゲームに勝つと思い、今日の犯罪者と同様に、自分がその法則の上位にあって、自分とは関係がないと思っている。これはもちろん何度も述べたようにエゴであって、多くの進歩した人を堕落させています。(3)善のためにかかる方法を無意識に応用する場合。これは前記の(1)に相当します。(4)望ましくない（他人にとっては害となるような）結果を得るためにかかる方法を無意識に応用する場合。これは前記の(2)に相当します。

ここで、だれかが他人にたいしてひどく怒っているとします。自分で気づいていようがいまいが、本人は怒りの対象にたいして強い想念を放射しているかもしれません。「気づいていようがいまいが」というのは次のことを意味します。もしかかる想念を知っていて放射しているならば、その場合想念の送り主は相手を傷つけようとしてかかる想念を意識的に送っているのです。ところがかかる想念を意のままに他人に実際に送ることができるという事実に送り主が気づいていなくても、その想念はやはり怒りの対象に送られるのです。そんなことが可能だとか、実際にフォースフィールドが含まれているという知識を本人が持たなくてもです。そして送り主は相手を傷つけているのです。この次あなたがだれかにハラをたてたときに以上のことを思い出してごらんなさい。

別な危険もある

自分の想念を自由に他人に送ることができるほどに発達している人々でも殆ど見すごしている別な危険があります。あなたが他人を傷つけてやろうとかトラブルを起こしてやろうという意図のもとに故意に他人へ想念を送るとして、しかもその場合に相手があなたの想念をキャッチするか感づくほどに発達しているとしますと、相手はそれをかわして影響を受けないようにするかもしれません。するとその想念波は元の送り主へ返って来て結局は自分を傷つけることになるのです。こうした場合一般に考えられるのは、その想念が相手を傷つけるよりも十倍も自分自身を傷つけることになるということです。これが真実であってもなくても、とにかく元の送り主にとってはきわめて有害であるという事実があります。

自分の感情を遠慮なしに爆発させるために起こるもう一つの望ましくない結果は、こうした態度は容易に習慣となり、やがて常に怒りっぽくなったり、何かを学び取るのに助けとならないイライラした状態におちいることにあります。しかしわれわれは別な道を行くことが可能なように、抵抗者の面前にいても親しく愉快な気分にひたる習慣を発達させることもきわめて容易です。何らかの方法によって自己の想念の型を訓練するにつれて、われわれは謙遜や幸福の想念でもって自分を発達させることもできますし、また利己主義、不調和、貪欲などの想念の型を発達させることもできます。右のどの道をあなたが行こうとも、こうした想念の型は習慣となって、まもなくあなたの行動を支配するようになりま

す。どの道を行くかは自分で選びなさい。

如何なる問題や疑惑にも二つの側面がある

雨が降ってあなたが憂鬱になるとすれば、あなたは環境から影響を受けています。しかしそのとき雨降りの光景の中に別な面を見て、自然界の装飾物（植物）に新しい生命（雨）が与えられつつあるというふうにきわめて楽しく感じることもできます。

雨が降るときに憂鬱な気分に支配されるならば、あなたはまもなく周囲の人々に同じような感じを与えることになります。こうした状態に容易になる理由はこの講座で後に述べることにします。簡単にいえばあなたの想念波は周囲へ放射され、その影響下にある人は類似の気分にひたりやすいのです。室内に憂鬱な人が一人いれば全員に影響を及ぼし、だれもが憂鬱になります。

あなたが、憂鬱な人、雨の日、または自分の感情に不愉快な影響を与える物事に出会ったならば、こんな望ましくない想念のすべてを楽しい愉快な想念に意識的にとりかえなさい。積極的に努力して微笑し、わざと楽しそうな言葉で相手に接しなさい。するとただちに気分がよくなり始め、まもなくほんとうに楽しくなりだすでしょう。

行なうのに最も困難な事の一つは、自己の周囲の下等な（と思われる）仕事を「この仕事がやれる立場にあるのだ」という感謝の気持をもって達成することです。病床で数年をすごさねばならぬ人たちのことを考えてごらんなさい。この人々は、ただ起き上がってわれわれが日頃不平のタネにしているようなつまらない仕事でも、できさえしたら感謝するでしょう。自分の想念の型をコントロールすることを学ぶのは個人次第です。そして心が気苦労や怒りなどから解放されているとき、印象類を容易に感受するようになり、心中に印象が鮮明に浮かぶようになるでしょう。あなたが高く進歩すればするほどますます印象を感受するでしょう。それは切れ目のないクサリのような関係にあります。

あなたが憂鬱な物事のかわりに楽しい物事へ心と想念とを向け続けるならば、次第に有利となるでしょう。周囲の人々も高揚されて、彼らの想念の型も改善されるでしょう。一人の憂鬱な人間が室内全体を憂鬱にするのと同様に、愉快な人は室内を明るくするでしょう。ただ憂鬱な想念を打ち消すことによってそれを中和せしめ、そらすことができるのです。微笑し、善良さを示しながら、快い気分を周囲の人々に放ちなさい。まもなく他人の不機嫌は解消し、微笑がうずまき、だれもがよい気分になります。これは大試合をひかえたコーチが自分のティームに元気づける話をするようなものです。うまくゆけば大いなる勇気がわいてきて、気分は新しい型といりかわります。

これはすべて一つの主要点に要約されます。周囲の人々に好例を示してごらんなさい。しばらくのあいだあなたの周囲にいた人々は自然に気分がよくなり、これが伝播するでしょう。これが起こる理由の一つは〝細胞から細胞に伝わる印象〟です。この想念の発生する様子については以下に詳述することにしましょう。

細胞から細胞へ伝わる印象

先に、自分の心中に大きな混乱を起こす印象類のすさまじい襲撃について述べました。この地球には三十億の人間がいて、無数の想念を発しているのみならず、また地球以外の高級なまたは低級な惑星があって、この無数の住民も同様に想念を発しています。更に過去に死んだ無数の人々から発せられた想念も存在しています。或る場合にはこれらの想念は死後も依然として強く残っているため、殆ど生ける実体のように振舞い、多くの霊媒も死者が存在すると考えています。しかし交霊現象においては死者が通信してくるのではなく、ときとして死者の想念印象が霊媒に感受されるにすぎません。この問題をはっきりさせる最上の方法の一つとしては次のような例を知ればよいでしょう。

第四課であなたは周波数の変調ということを知りました。これは或る周波数の波を別な周波数と結合させることです。別な言い方をすれば、搬送波に知的メッセージを乗せることです。この搬送波は実際にエネルギーを持つフォースフィールドを放射していますので、われわれはフォースフィールドに或る性質の知的メッセージを加えています。われわれはフォースフィールドを変調しているわけです。

小さなフォースフィールドは互いに結合して大きなフォースフィールドになる

あらゆる細胞は自己のまわりに小さな個々のフィールドを持っています。細胞は原子から成り立っていますが、この原子も小さな個々のフォースフィールドを持っています。第四課と第五課に示された例のように、この小さなフォースフィールドのすべては結合して一大フォースフィールドとなりますが、これは小さなフィールドの総計です。いまこのフィトルドがそれに接近した別なフォースフィールドによって修正されたならば、最初のフォースフィールドは二番目のそれによって変調されたと考えることができます。この修正すなわち変調は、物理的な電気の法則に従って電気的な力の吸引・反発により起こされます。

一個の細胞の周囲のフォースフィールドはその近くの別なフィールドと合して少し変化します。これは電気的なフォースフィールドの変調によって物理的に起こるのであるということを忘れないようにして、以上を要約し、今後は「細胞は印象を吸収する」ということでこの過程を述べることにしましょう。

音声の再生、すなわち検波

テープレコーダーにおいては音声電流が録音ヘッドの内部や周囲に磁力線を発生させ、それがテープ上に磁化されます。テープには磁性酸化鉄粉が塗布されています。テープから音声を再生しようとする場合は、小さなコイルから成る再生ヘッドの所でテープを走らせさえすればよいのです。ずるとテープの磁力が再生ヘッドのコイルに作動し、そこに電流を流します。この電流は最初にテープを磁化したのと同じ状態の電流です。こんなふうにして音声を含んだ電流は再生され、スピーカーから鳴り出します。

きわめて広い意味においては、人間が或る種の知性を表わす周波数の波を傍受して復調する状態を説明するには、テープレコー

ダーの例を応用することができます。〝検波〟という言葉はまさしく読んで字の如しです。〝変調〟が搬送波に音声を乗せることを意味するならば、〝検波〟はその音声電流を取り出すことを意味します。検波すればメッセージ、音楽、その他最初にフォースフィールドを変調するのに用いられた音声を再生します。ここでは家庭用ラジオに応用される検波回路の技術的な説明は省略することにしました。これはテレパシーに応用される検波とは方法が異なるからです。テレパシーで応用される検波はむしろテープレコーダーに応用される再生の方法に似ています。

細胞が受ける印象の例

人体、動物、無生物その他何にせよ、内部の個々の原子の持つフィールドが結合して成るフォースフィールド（複数）を有しています。他の何かのフォースフィールドがそれに接近すると、細胞は前に述べた変調の過程によって自己のフィールドを〝改造〟し、接近してきたフィールドから情報を吸収します。

こんなふうにして家屋を作り上げている細胞は、居住する人間のフォースフィールドによって自己のフォースフィールドを改造して印象類を吸収するのです。ゆえに居住者が常に楽しい気分を保っていれば、家屋はその印象を吸収します。もし居住者が常に闘争的であるならば家屋もそれを吸収します。

いまかりにこうした印象を感知できる（検波する）人がいるとします。本人が家に入ると、きわめて心地よく感じるか、または気分が悪くなるでしょうが、これは家屋を形成している細胞から本人が受ける印象なのであり、本人の発達の程度にもかかっています。本人の感受力の程度に応じて家から放たれる印象にそれと気づかずに感応しているのです。もし本人がきわめて感受力が強ければ、過去にその家で行なわれた出来事を次々と語ることができるでしょう。これは書物を読むようなものです。これは本人のフォースフィールドが家屋のフォースフィールドと接触することになり、情報の交換が起こるためです。

ところが印象にたいしてべつに感受力のない人が同じ家に入っても、きわめてぼんやりした調和または疑惑を感じるか、または全然印象を感じないかもしれません。いずれにしても反応の度合は次の二つにかかっています。(1)個人の感受力。(2)家屋のフォースフィールド中の細胞の印象の強さ。

肉体の生まれかわりは確実な科学的事実

如何なる細胞も他の細胞によってこんなふうにして（細胞のフォースフィールドの変調によって）記憶されている知識に気づくようになります。人体を形成している原子は過去の歴史を通じて無数にくり返しくり返し利用されてきました。原子は決して破壊されません。ただ位置を変えるだけです。

たとえば樹木が枯れたり燃えたりして気体に変わります。見た目では消えたようで永久に失われたかの如く思われますが、これは幻想にすぎません。というのは種々の気体から成るその樹木の実体は依然として存在するからです。早晩この気体は呼吸によって空気と共にあなたの肺へ送り込まれるかもしれません。そして

肉体の一部となるでしょう。こんなふうにして肉体の生まれかわりも、年月の径過に従って異なる人間の肉体または他の物体中に現われる原子（細胞）でもって起こります。こうしてあなたの肉体を作り上げている細胞も、かつて過去の偉人の肉体中にあったかもしれない原子で出来ているということは容易にあり得ることです。

細胞はあらゆる体験の記録を運ぶ

細胞は過去に持った体験すべての消しがたい記録を運びます。これがいわゆる前生の記録の殆どすべてが実際に存在する理由です。或る人は自分がかつてプラトンかシーザーであったという印象を受けるかもしれません。しかし実際には本人の肉体を作り上げている少数の細胞がこれら過去の偉人の肉体中に存在したのかもしれません。これらの細胞（原子）は依然としてこの前生の存在の〝記憶〟を運び、肉体のフォースフィールドの残りと共に相互作用によって、この〝記憶〟は本人の脳へ伝えられるのです。本人は前生においてプラトンやシーザーであったのではありません。

このような印象はこうあって欲しいという願いや個人のエゴで選ばれるため、かつて偉人であったとか王や女王であったというようなこの種の記憶は〝ウソの記憶〟と呼ばれています。自分の前生は煙突掃除屋だったとか、ミゾ掘り人夫だったとか、馬ドロボウであったというような記憶を述べる人は殆どいません。しかるに世の中に存在してきた無数の一般人を考えれば、このほうがほんとうかもしれません。

あなたや、あなたの周囲の無数の人々から放たれる想念は、自己の環境を形成している原子や細胞にそれ自体を（想念を）印しています。これが実際に起こる光景を思い浮かべるのは困難ですが、次の方法に従うならばたぶん真の様子を見ることができるでしょう。

先ず一個の小さな原子のまわりにフォースフィールドを伴った状況を思い浮かべて下さい。今度は一個の分子を形成するために結合した数個の原子を思い浮かべて下さい。すると各原子のフォースフィールドは分子のまわりで結合して一つのフィールドを形成します。こうして次第に想像をすすめて、ついには巨大なフィールドを持つ地球を思い浮かべてごらんなさい。

さて、いまわれわれは地球を広大な宇宙の中の微小な原子であると考え、他の惑星群を他の原子であるとみなし、各惑星がそれぞれ別個にフォースフィールドを持っているとしますと、すばらしい光景が展開し始めます。すると今度は各惑星が連結して一つの巨大なフォースフィールドを形成し、これが太陽系全体を表わすとともに、太陽系全体は一個の分子の表われとなります。同様に、この太陽系は他の太陽系すべてと連結して、宇宙の万物は始めも終りもない、一つの無限の、巨大な脈動する実体であるということになります。それは内部に英知ある力を持った微小な原子すべてから成る英知ある力です。

もし全宇宙が有限であるとし、われわれが遠くから離れてそれを観察できるとすれば、その周囲に一大フォースフィールドがあるにしても、子細に調べれば多くの小さなフォースフィールドが

個々の実体として働いていることがわかるでしょう。その有様を思い浮かべることができますか？　これはレンガ作りの建築物が全体としては一つの建物であっても、個々のレンガは建物とは別個なものとして調べることができるのと同様です。

要約すると次のとおりです。「創造された万物は英知ある一大フォースフィールドの一部である。われわれ個人のフォースフィールドと英知は一個の原子のそれと比較できる。それは個別化されているが、一大フォースフィールドの一部である。この大フォースフィールドは無限であって、あらゆる知識、あらゆる英知、あらゆる力の結合体であり、宇宙の統治者である」

右が何を意味するかわかりますか？　われわれは他の創造物すべてと〝一体〟なのです。われわれは自然界の他のあらゆるものと意志伝達をし合う力を有しているのであり、あらゆる知識に近づける力をも有しているのです。

もしわれわれが宇宙のあらゆる太陽系と、大海の一部としてのそれらの一大フォースフィールドを思い浮かべるならば、われわれ人間はこの海の中の水滴です。人間はより大きな世界を形成する一部分であるとしても、依然として個別性を持っています。しかし自身の内部から或る程度悟ってくれれば、われわれは大海中の自分の個々の位置について気づくようになり、その海中に貯えられている知識のすべてを引き出すことができるのです。そのとき宇宙の統制力の一部となって真に〝自分を知り始める〟のです。

超自然現象は存在しない

細胞の印象や細胞から細胞への意志伝達の研究を続けるには、超自然現象というようなものは実際には存在しないということを知るようにならねばなりません。超自然界（注。霊界など）が存在するという考え方は長いあいだ行なわれていて、真の知識の欠乏と迷信の横行のために正しいものとされています。人々は自分の理解できないものにたいする解釈として、霊魂というものの考えを常に容易に受け入れています。

昔の人々はあらゆる物事を怒った風の神、戦争の神、豊作の神、この神、あの神のせいだと片づけました。海は海神が支配するものと考えられました。今日こんな原始的な考えを持つ人は殆どいませんが、心霊現象の分野においてはもっと原始的な考えが存在し、無数の人々がまどわされてそれを受け入れています。多くの人が依然として幽霊、鬼神、よう精、魔神などを信じています。また生きている人が死者と通信することができると信じている人も多くいます。多少とも知識のあるわれわれはこうした人々を無知だとみなしてはいけません。むしろ教育的発達の段階において少し低いのだとみなすべきです。彼らが立っている場所にはわれわれもかつて立ったことがあるのです。そしてわれわれが今日立っている場所には彼らもいつか立つでしょう。

ここで多くの読者に疑問が残るでしょう。死者の霊が霊魂として帰って来ないというのなら、幽霊現象の真の解釈はどうかと。幽霊は実際には存在しないと信じている人も多いのですが、さりとてこの人たちは正確な解答も出してはいません。

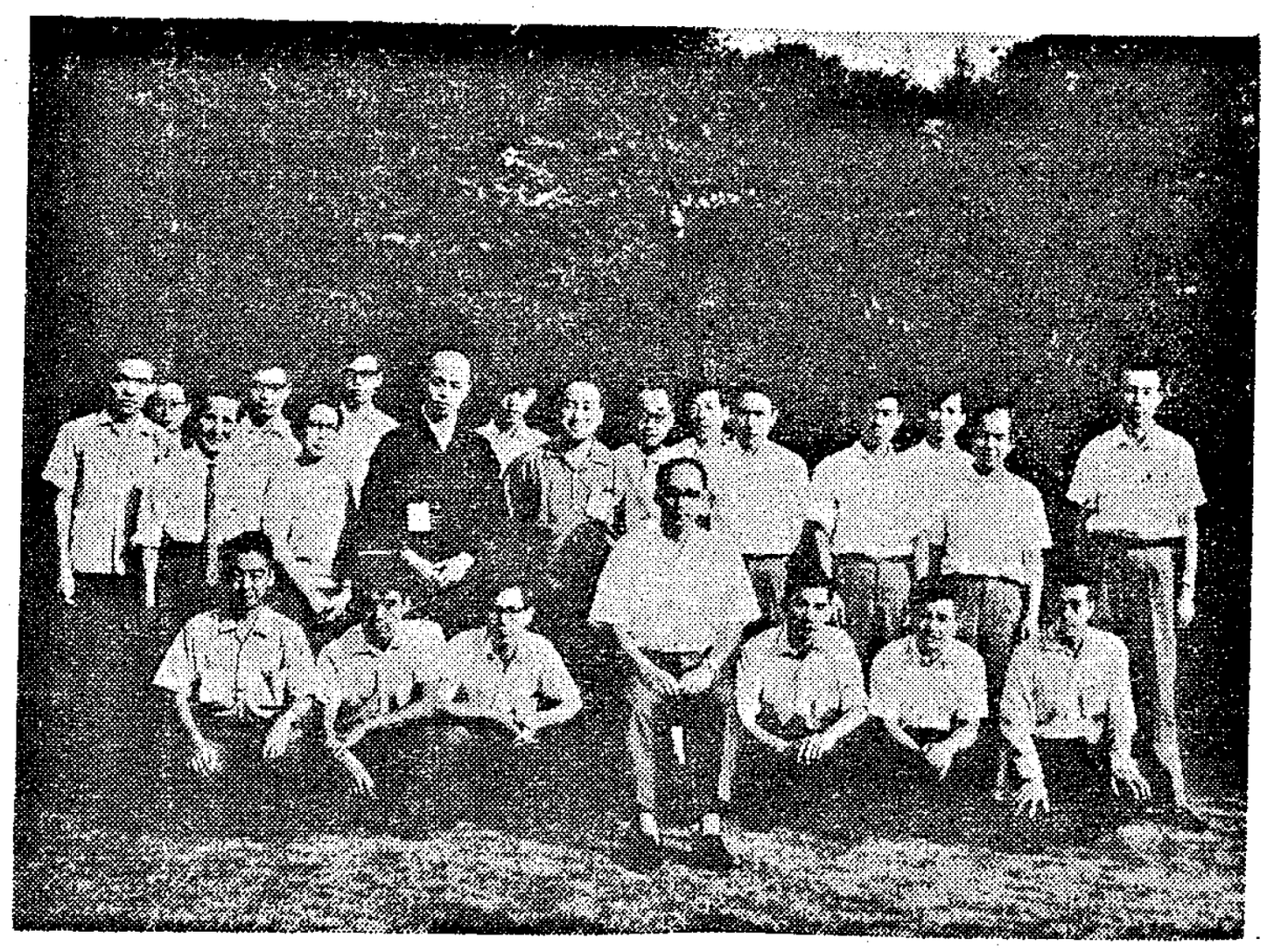
今日各方面には多くの円盤研究グループがありますが、そのなかには高い進化をとげた惑星から来た人と（19ページ下段へ続く）

UDの会合始まる！

日本GAPは今春来会合を主体にしたUD（宇宙研究同好会）の発足を企画していましたが、去る七月十七日に第一回総会を都内新宿の〝東京電力サービスセンター〟で午後一時から開催しました。当日は約三十名の会員が出席し、多忙のため欠席した久保田会長の録音テープによる挨拶に始まり、高橋史氏の司会により出席者の自己紹介、テレパシー実験、UFO問題の討議、会の運営に関する意見交換等、終始なごやかな雰囲気のなかに行なわれて、五時過ぎに一次会が終了、続いて場所を変えて夕刻より世田谷区成城町の中田晴久氏宅にて二次会を開き、きわめて有意義な第一回の会合を持つことができました。関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

八月八日には会長を囲む特別総会が中田氏宅にて午後一時より開かれました。この日炎暑にもめげず出席者二十四名は自己紹介の後、会長講演、質疑応答、UD新規約の決定、写真撮影、テレパシー実験をかねた二十のトビラ等で楽しいひとときをすごしました。お世話下さった方々に深謝仕ります。

新規約は次ページに掲載してありますから、今後はどしどし出席され、積極的に意見や体験を発表されますようお願いいたします。中田氏のお宅は「入りやすくて、去りがたい」ともいうべき心あたたまる会合場所であることを付言します。なお会長は毎月出席することは不可能ですから、会長の出席有無に関してはご面倒でも事前にご照会下さい。



写真は八月八日の特別総会。前列中央が久保田会長。（中田氏撮影）

UDの運営については先に配布しました〝宇宙研究同好会の枝折〟に方針が記載してありますが、新規決定の部分のみを次に掲げます。

(1) 当番分担　八月八日の特別総会で今後一ヵ年間の当番が次のように決定した。（敬称略）九月高橋、十月渡辺、十一月及川、十二月安本、四十一年一月和田、二月永田、三月橋本、四月中島、五月橋本、六月安斎、七月中田、八月佐藤。

(2) 当番担当事項　主として会合を司会する。正当番は担当月に指定の場所で会合を開き、結果を会長に報告。特に部外者のUFO問題に関する講演、映画、催し物見学、特殊な目的の旅行等を企画した場合は事前に会長に連絡し、会長は機関誌に詳細を予告する。

(3) 総会開催日時　毎月第二日曜日（ただし今年九月だけは第一日曜日）、午後一時より。

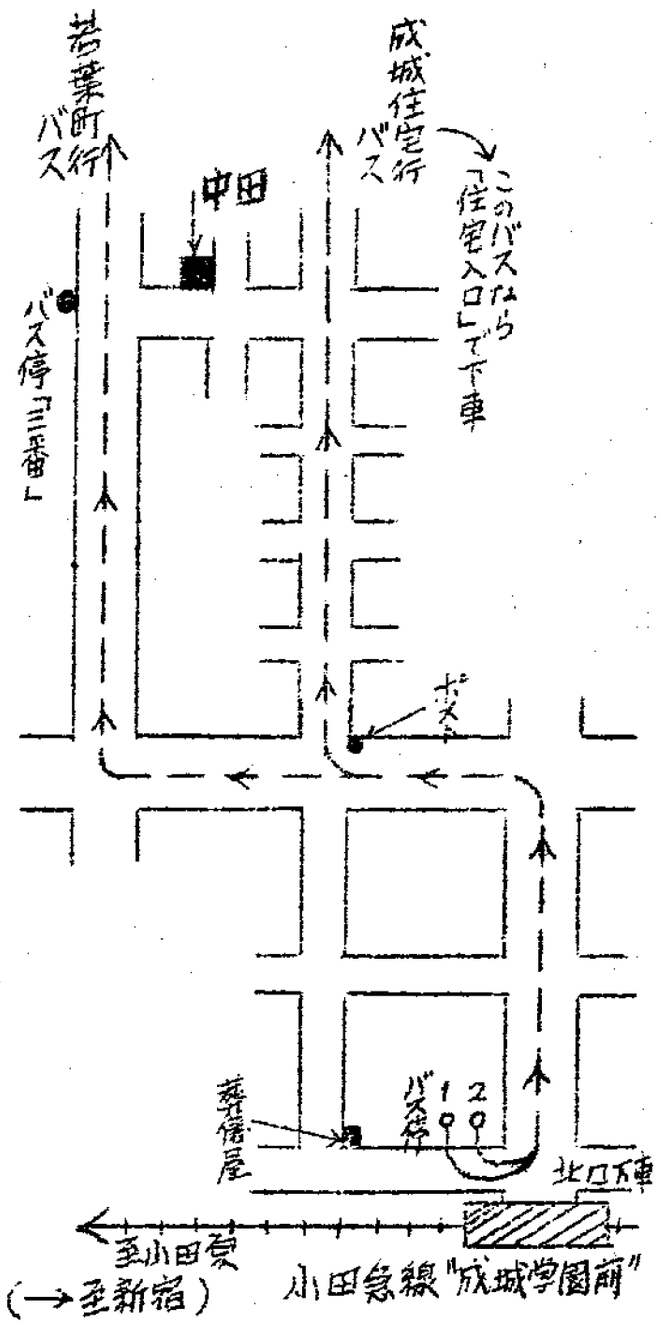
(4) 総会開催場所　東京都世田谷区成城町五六一　中田晴久氏宅。電話（四一六）一三五〇。小田急線〝成城学園〟下車、徒歩十二分。下図を参照。

(5) 当日会費　会場費（茶菓代）として出席者一人一〇〇円。（UD積立貯金とは別）

(6) UD積立貯金　会長宛直送にても可。または会合日に会計担当の楠元幸二氏が集金する。

(7) グループコンタクト発生時の処置　マスコミにたいしては公証官司を介し、けん制し、わい曲の報導を防止し、真実の発表を行なわしめるよう努力する。

その他不明の個所については会長宛ご照会下さい。



生命の科学　刊行！

ジョージ・アダムスキー著　¥300
久保田八郎訳　〒50

先に本誌に連載して好評を博した〝生命の科学〟講座を単行本として刊行しました。これは生涯を真理の使徒として挺身したジョージ・アダムスキーの絶筆であり、現代最高の真理の書として不滅の光を放つ金字塔です。これによってあらゆる苦悩や不幸は解消し、あなたに無限の活力と勇気とを与え、驚くべき奇跡を生ぜしめて、環境は一変するでしょう。ぜひ座右におそなえ下さい。悩める知人にもお贈り下さい。

＊都内一流のタイプ印刷所に依頼した美麗タイプ引刷。
＊上質紙使用　＊送料は3部まで100円。4部以上は120円。＊限定版につきご注文は早目に久保田宛に。

編集後記

◎毎度のことながら本誌の発送が遅れがちとなり、申し訳ありません。今夏は少々疲労を感じたのと雑事が多かったために仕事がはかどりませんでした　今後も多少は発送が遅れるかもしれませんが、休刊にはしませんからご安心下さい。黙々とがんばるつもりです。書簡の作成も思うようにゆきませんので心苦しいのですが、返事は必ず出す主義ですからこれまたご心配はいりません。

◎米国のマリナー四号の火星写真により、火星には知的生物がいそうにないという印象を一般に与えたようですが、これは金星ロケットの場合と同様、かりに大国が驚異的な事実をつかんだとしてもオイソレとそれを発表するかどうかを先ず考える必要があります。不安と恐怖とに満ちた現在のこの世界で、米政府（またはソ連）がだしぬけに「近隣の惑星に人類がいることが判明した」などと発表しようものなら、どんな結果になるかはおわかりでしょう。株の大暴落に始まり、経済界の動揺、学界の混乱、敵国との激しい泥仕合、そしてついには大暴動または戦争の発生ともなりかねません。大国の首脳部はおそらくそこまで考えているのであって、内幕にはわれわれの想像の及ばぬかけひきや策略があるはずです。したがって現段階の惑星写真などには信をおかぬほうが賢明です。アダムスキーの〝空飛ぶ円盤同乗記〟から明らかにヒントを得たと思われる宇宙ものドラマやマンガがはんらんしていますが、これからみれば少年少女たちの視野を拡大するのはむしろ民間側の熱意によるものであるといえるでしょう。四才になる私の子供は〝テレパシー〟という言葉の意味を理解していますが、これは私が教えたのではなく、テレビの宇宙ものマンガの影響です。

◎〝空飛ぶ円盤同乗記〟といえば依然としてこれを嘲笑する向きが多いなかで、この書を徹底的に研究して円盤の推進理論を発見した人が本会々員中少なくとも二人います。両者とも電磁気の専門家です。最近この書が高文社から一千部増刷出版されました。（東京都文京区本郷五丁目三〇―二〇、有信堂・高文社。一部三〇〇円。振替・東京一四一七五〇番）

◎UDが会合を主体としているため、出席できないから名簿からはずしてくれといわれる方がありますが、いずれ地方でも会合を行ないますから一応名前だけでも連ねておいて下さるようお願いします。

◎〝生命の科学〟講座が単行本として刊行されました。これは先に連載した訳文を全面的に改訂した決定版です。この際ぜひお求め下さい。送料だけは切手代用でOKです。この出版にあたっては会員高橋史氏の絶大なご援助がありましたことを付記しております。

◎本誌27ページに掲載した写真がご入用の方は編者宛お申し込み下さい。キャビネ判一枚実費送料共五〇円。

◎本誌の旧号で一九六三年七月・八月号以後のものが少部数ずつ在庫しています。入手希望者はご照会下さい。

◎本号は印刷を専門家に依頼したのと写真をのせたために経費がかさみ、28ページにしました。ご了承をお願いします。

◎寄金は如何ほどでも歓迎します。重要なのは資金です。（久）

日本GAPニュースレター　1965　7月・8月号

翻訳編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP（別称・UD）

島根県益田市益田古川
振替・松江　二六三〇
（久保田八郎名儀）

通巻第29号

昭和四十年八月二十日発行
―隔月刊―

頒価一三〇円・送料二〇円
☆一カ年分送料共900円